

ミケーネ土器にみる東地中海世界

テル・レヘシュ遺跡から大量に出土する土器破片の中に、丁寧に仕上げられひととき異彩を放つものが含まれていた。よく精汰されたきめ細やかな胎土にスリップを施し、さらに黒または赤系の褐色で彩文を描いた土器である（写真1, 2）。非常に小さな破片なので、残っている彩文も部分的であり、一見ではどのような構図をもっていたのか想像もつかない。3000年の歴史が眠る遺跡から見れば、このような極小の土器破片に一体どれくらいの価値があるだろうかと思うかもしれない。



写真1 土器破片A

写真2 土器破片B

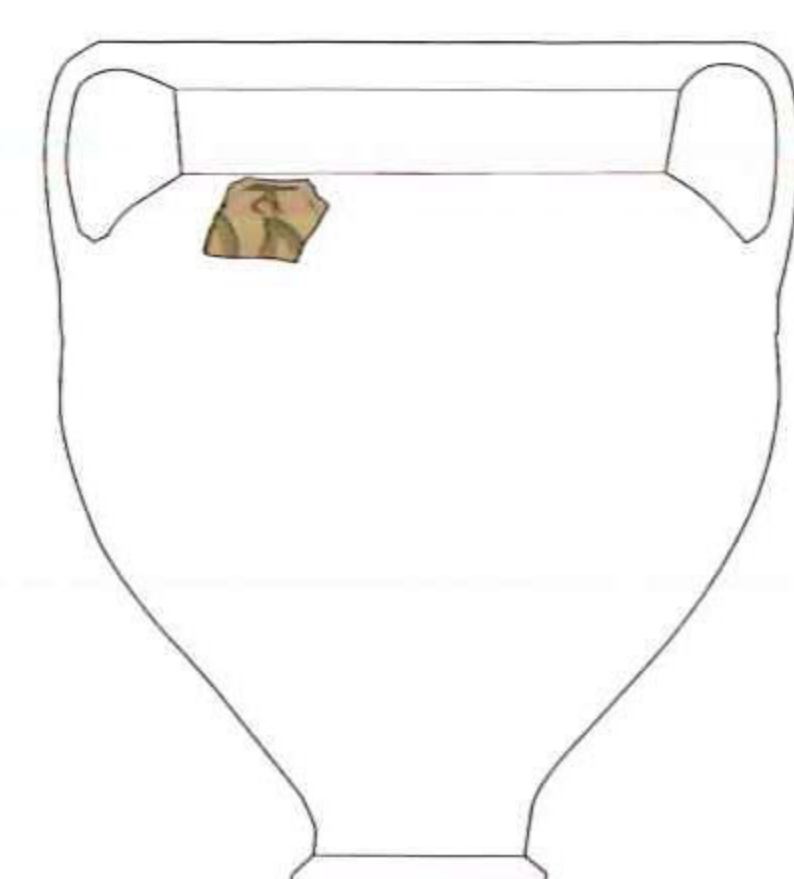


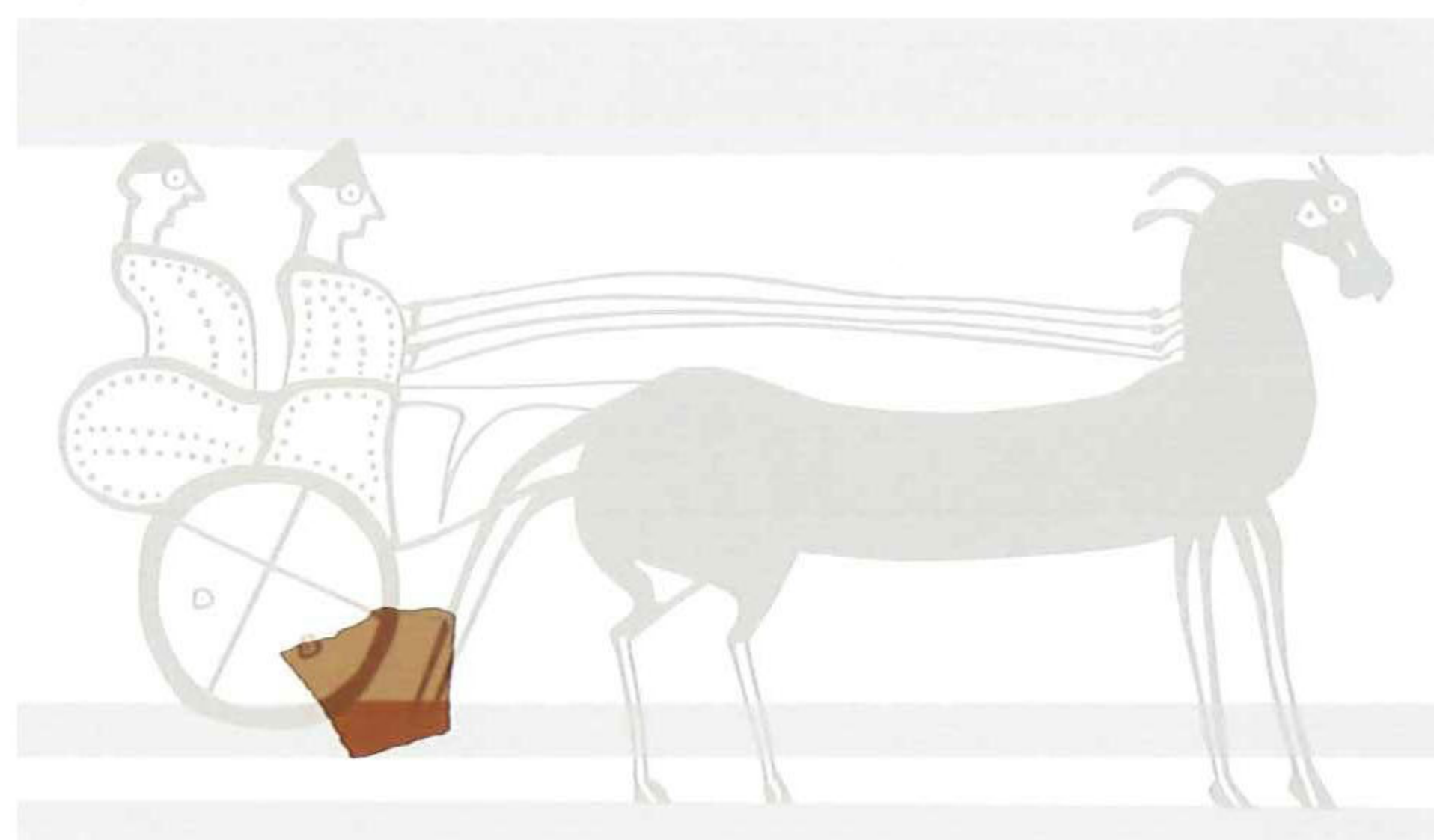
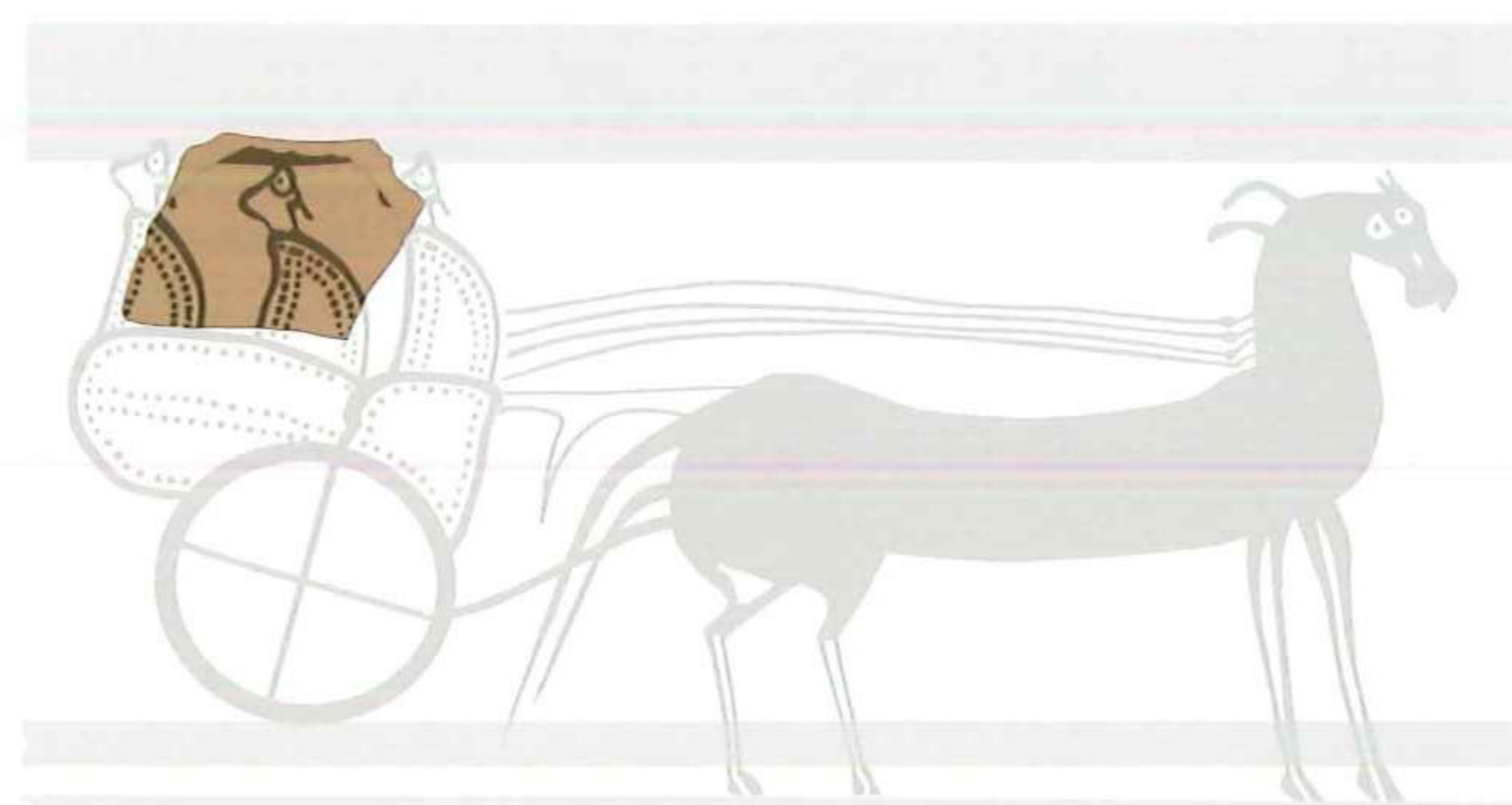
図1 土器破片Aの復元図



図2 土器破片Bの復元図

胎土、スリップ、装飾をもとに類例を探すと、東地中海沿岸地域で出土するミケーネ土器の「戦車の図の壺」にたどりついた。それは、2頭の馬が引く戦車に少数の人物が騎乗する場面を描いた壺である。キプロス島から出土した類例を参考に、土器破片AおよびBの復元を試みた（図1, 2）。土器破片Aは、3人の人物を乗せた戦車が右へ向かって進む場面を描いたものと考えられる。また、土器破片Bは戦車の車輪部分とそれを引く馬2頭の尻尾の一部であったことが推測できる。騎乗者が何人であったかはわからない。

このような構図は様式化されており、とくに前14世紀から前13世紀頃のキプロス島を中心とした東地中海沿岸地域で出土するアンフォラ状クラテル（2つの把手をもつ容器）に見ることができる。このうち科学的な分析が行われたものもあり、その結果、ギリシアのパロポネソス半島東部の胎土を用いて作られたことが判明している。つまりギリシアで



製作された壺が東地中海沿岸地域へ輸出されたものと考えられる。あるいは胎土そのものが輸入され、現地に移住していたミケーネ人の手で製作された可能性もある。実際、同時代にトルコ南部の沖で沈没したとされる「ウル・ブルンの難破船」からは、銅塊、錫塊、ガラス塊など製品化される前の原料が発見されている。胎土が交易されていても不思議ではない。

また、テル・レヘシュ遺跡からは「鍔壺」の断片も出土している（写真3）。天理参考館にはその完形品が収蔵されている（写真4）。丸い胴部に1つの注口と、名前の由来となった鍔の形状をした把手が付いている。通常の土器なら開いているはずの口部がふさがっているため、少し違和感を与える。どのように使用したのかと、鍔壺を手に取り、片手で液体を注ぐ動作を試してみた。すると、無意識に鍔の輪の中へ人差し指と中指を差し込み、ふさがれた口部に親指を置いて、それを支えに注口を傾けていることに気が付いた。なるほど、合理的な作りなのだ。さらに、小さな注口に栓をするだけで内容物の品質を留めることができる。鍔壺がワインやオリーブ油などの液体をおさめるのに最適な容器であったことはうなづける。地中海沿岸地域の



0 5cm

写真3 鍔壺の断片



キプロス島の南海岸

至る所で出土するのは、人気の高い商品であったことを物語っている。テル・レヘシュ遺跡は、当時の大きな港町だったテル・アブ・ハワム遺跡から直線距離にして約50kmも内陸にある。しかしテル・レヘシュ遺跡でオリーブ油の生産が活発であったことを考えると、鍔壺が出土するのはごく自然なことである。おそらく文物が集中したメギド遺跡のような大都市を経由して届いたのだろう。

遺物は自ら多くは語らない。下手をすれば単なる瓦礫の山の一部分と化す。しかし、こちらからアプローチすることで、例え小さな土器破片でも、その背景にある壮大な世界に導かれることもある。遺物を通して古代の東地中海を舞台とした人々の交流の様子を垣間見ることができるのは、考古学に携わる者としてこの上ない喜びである（飯降）。



写真4 天理参考館所蔵の鍔壺（高さ12.7cm）